



TITLE:

日常実践としての学習理論 : G.ベイトソンとJ.レイヴ&E.ウェンガーのAlcoholic Anonymous (AA)をめぐる考察を手がかりに

AUTHOR(S):

安川, 由貴子

---

CITATION:

安川, 由貴子. 日常実践としての学習理論 : G.ベイトソンとJ.レイヴ&E.ウェンガーのAlcoholic Anonymous (AA)をめぐる考察を手がかりに. 京都大学生涯教育学・図書館情報学研究 2006, 5: 91-102

ISSUE DATE:

2006-03-31

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/43891>

RIGHT:

## 日常的実践としての学習理論

—— G. ベイトソンと J. レイヴ&E. ウェンガーの  
Alcoholic Anonymous (AA) をめぐる考察を手がかりに ——

安 川 由貴子

### A Learning Theory as Practices in Every Life

—— from Considerations on Alcoholic Anonymous (AA) of Gregory Bateson  
and Jean Lave & Etienne Wenger ——

Yukiko YASUKAWA

#### 1 はじめに

本稿では、Alcoholic Anonymous (以下、AA) で行われている実践を事例として学習理論としての分析を試みた、文化人類学者である G. ベイトソンと社会人類学や社会学習理論で著名な J. レイヴ&E. ウェンガーの理論を手がかりとして、AA から導かれる「自己」概念への示唆や生涯学習論への繋がり可能性を考察していくことを目的としている。

AA とは、アルコール依存症者に対するセルフヘルプ・グループ（自助グループ）のひとつで、「経験と力と希望を分かち合って共通する問題を解決し、ほかの人たちもアルコールから回復するように手助けしたいという共同体である<sup>1)</sup>」。1935年にアメリカで始まり、現在では日本も含めて世界150カ国以上に拡がり、メンバーの数も200万人以上といわれている。酒をやめたいという願いさえ持っていれば誰でも参加可能で、会員登録も会費も不要である。各地で行われているミーティングに参加して、互いの経験を語り合い聞くことを通じて、「飲まないで生きること」（AAの用語では Sobriety：単にアルコールを飲まないだけでなく新しい人生を生きていくことを意味している）を目指している。次に、G. ベイトソンは、文化人類学、生物学、精神医学などの分野を脱領域的に渡り歩きながら、私たちの生きた世界の「結び合わせるパターン（the pattern that connects）」を求めて探求を続けた思想家である。ベイトソンのコミュニケーション論は、「学習」を考える上でも興味深い。また特に、ベイトソンによる論文『『自己』なるもののサイバネティクス——アルコール依存症の理論』（Bateson, 1971）は、ベイトソンの様々なアイディアが結集している重要な論文のひとつといえる。ベイトソンは、アルコール依存症に関わるAAへの分析を通じて、「西洋に特徴的な『自己』<sup>セルフ</sup>の観念を支える一群の諸前提を問題にする。同時に、その『自己』観念と絡む、西洋に特徴的な誤謬（のうち甚だしいもの）の修正をもたらすような諸前提についても、並行して考えて<sup>2)</sup>」いくことを意図していた点で非常に興味深い。そして、J. レイヴ&E. ウェンガーは、学習とは「状況

に埋め込まれたもの (Situated Learning)」であることを主張し、その学習に対する関わり  
のあり方を実践共同体への「正統的周辺参加 (Legitimate Peripheral Participation)」とし  
て提案したことで知られている (Lave & Wenger, 1991)。彼らは、その実践共同体への正統  
的周辺参加が見られる事例として、ユカタンの産婆の徒弟制、ヴァイ族とゴラ族の仕立屋、海  
軍の操舵手の徒弟制、肉加工職人の徒弟制に加えて、断酒中のアルコール依存症者の徒弟制を  
取り上げている。そこでは、教えられるという直接の行為は存在せず、あくまで学習する過程  
であるということが強調されている。よって、レイヴ&ウェンガーの理論は、仕事における学  
習や「技」の伝達、あるいは経験による学習や日常生活におけるインフォーマルな学習を考え  
ていく上でも非常に参考になると考えている。

このように、レイヴ&ウェンガーが考察の対象としている実践共同体の1つであるAAの日  
常的实践は、ベイトソンにとってもコミュニケーション論や学習論として大きな関心を寄せて  
いるものである。

## 2 G. ベイトソンによるAAの分析——「弱さ」のもつ力のパラドックス——

### 2.1. 自分の「弱さ」を認めること

ベイトソンは、アルコール依存症の原因を、「自己」と「酒」に対して抱いている個人の世  
界に対するあり方にあると考えた。つまり、酒に対して自分は勝てるのだ、自分は酒をコント  
ロールできるのだという認識論的前提に立ってしまっているところに誤謬があると考えた。通  
常、アルコール依存症の人間をかかえた家族や友人は、「もっと強くなれ」「酒の誘惑に打ち勝  
て」と叱咤する。そしてアルコール依存症者自身もまた、「醒めている」間は、酒に打ち勝て  
ないのは自分の「弱さ」にこそ「問題」があるのだと考えている<sup>3)</sup>。

AAにおいて、回復のための「12のステップ<sup>4)</sup>」が示されているが、その第1ステップと第  
2ステップでは次のように記されている。

1. 私たちはアルコールに対して無力であり、思い通りに生きていけなくなったことを認めた。
2. 自分を超えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。

これらは、アルコールとは戦えない、アルコールに対して無力な自分を認めることである。  
「AAの作戦は、このコンテキスト構造の変化を全力を挙げて阻止することに向けられている<sup>5)</sup>」  
といえる。「自己」VS「酒」という対立図式から解放され、〈自己+酒〉という一体となった  
パーソナリティとして認識していくことを意味している。つまり、「酒との交わりを、自己の  
『外側』にセットし、『自分』が『飲酒』に『抵抗』するという構図に収めてしまう<sup>6)</sup>」という  
状態から、『お前の本性はすでに酒びたりなのだ』と論ずことで、AAはアルコール依存症を  
患者の『内側』にしっかりとセット<sup>7)</sup>していくということである。これはベイトソンに言わ  
せれば、二元論的なエピステモロジー (認識論) が変化していくことでもある。

ベイトソンは、アルコール依存症者が抱いている、自分は酒をコントロールすることができ  
る、酒に打ち勝つことができるのだという感情を「アルコール依存症的プライド」と呼び、そ  
れはAAが「プライド」と呼んで諷める生の原理であるという。ここで、このような「アルコー  
ル依存症的プライド」と「自己」との関係をより理解する上で、私たちのコミュニケーション

の世界の関係のパターンを「対称型 (symmetric)」と「相補型 (complimentary)」として分類したベイトソンの説明が有効となる。「対称型」とは、「二者関係において、AとBの行動が(AとBによって) 同じものとして見られ、しかもAの行動の集まりがBを刺激してその『同じ行動』を強め、逆にまたBの行動がAの『同じ行動』を促進するようなかたちで二つが連係しているとき<sup>9)</sup>」の関係をいう。軍事競争、隣人同士の見え張り、スポーツ競技などに見られる。「相補型」とは、「たとえば見る行為と見せる行為とが互いにフィットするように、AとBの行動が同じでないが相互にフィットするものであり、しかもAの行動の強まりがBの行動の強まりを呼ぶようなかたちで両者が連係しているようなとき<sup>9)</sup>」の関係をいう。支配－服従、養育－依存、見る－見せるなどの関係はその例である。また、「対称型」と「相補型」は共に、それぞれに強化されすぎるとエスカレートしてしまいその関係のパターンが破壊してしまうような「分裂生成」にいたる性質を持っている。一方、「対称型」と「相補型」の「2つの型が混交したシステム」の場合には、互いに打ち消しあう力がはたらくため、分裂生成にブレーキがかかるといえる。それでは、アルコール依存症者がもつプライドは、対称的關係が支配するコンテクストに根ざすものなのであろうか、それとも相補的關係が支配するコンテクストに根ざすものなのであろうか<sup>10)</sup>。ベイトソンの答えは前者である。ベイトソンは、「西洋文化内のノーマルな飲酒習慣が、対称型に向かう強い傾きを持っているという点<sup>11)</sup>」を指摘し、「アルコール依存者は、現実の他者、架空の“他者”とも、徹底して対称的で、終始分裂生成的な関係に走る<sup>12)</sup>」のだと述べる。そして、AAのいう「霊的体験」によって、アルコール依存症者のエピステモロジーが「激しい対称型から、純粹なまでの相補型へと、劇的に変貌していく<sup>13)</sup>」のだ、とその変化をベイトソンは読み取るのである。そのとき、対称型から相補型への移行は、同じシステムにおいての移行ではなく、自己を取り囲むより大きなシステムに対して、相補的という意味である。〈自己というコミュニケーション・システム〉それ自体を取り囲む、より大きなシステム(AAの用語でいえば、「ハイヤーパワー(自分なりに理解した神)」であり、ベイトソンの言葉でいえば、〈エコシステム〉)の存在に明白に気づいて認識し、そのシステムと相補的な関係になるということである。したがって、この場合の対称型から相補型への移行は、より大きなシステム、より大きな次元への飛躍を意味しているといえるだろう。そして、その世界との関係を保ちながら新しく生き直していくことを意味するのである。それは、「負け」を意味するのではない。自分の「弱さ」を認めることによって、むしろ新しい再生への力を生み出していけるというパラドックスがそこに存在しているのである。

以上のように、「相補型」の関係のパターンに関して2つのことを言えるであろう。まず、「自己」VS「酒」という対称型のパーソナリティから、酒に対して勝てない自分を認める(=酒に対して相補的であることを認める)ことによって、〈自己+酒〉という自己と酒が一体となって1つのパーソナリティを帯びたシステムへと変換されるということである。次に、その〈自己+酒〉というシステムに表される〈自己というコミュニケーション・システム〉が、自分を越えた大きな力、自分なりに理解した神に対して相補的であるということである<sup>14)</sup>。このような変化が、回復への第一歩となるのである。それでは、どのようにして、アルコール依存症者のエピステモロジーが対称型から相補型へと変化していくのだろうか。つまり、酒に勝て

ないというプロセスと、その酒に勝てない自分が自分を越えた大きな力に気づきそれにゆだねるというプロセスにどのように至るのであろうか。その「きっかけ」、「引き金」となるのは「どん底」の体験<sup>15)</sup>である。AAにおいても、「底が極まる」という現象に大きな価値を与えられており、落ちるところまで落ちていないアルコール依存症者は救われる見込みが少ないとされている<sup>16)</sup>。言い換えれば、「どん底」まで落ちてしまったときこそ、変化の可能性の「満ちた」時といえるのである。

## 2.2. G. ベイトソンの「学習とコミュニケーションの階型論」への展開

次に、AAにおけるアルコール依存症者の回復のプロセスに対して行ったベイトソンの分析を、ベイトソンの「学習とコミュニケーションの階型論」に照らして考えてみたい<sup>17)</sup>。

ベイトソンは、ラッセルとホワイトヘッドの〈論理階型 (logical type) 理論〉に依って、学習というものの「変化」の質の違いを、ゼロ学習、学習Ⅰ、学習Ⅱ、学習Ⅲ、学習Ⅳという階型に分類した。「ゼロ学習」とは、「反応が一つに定まっている<sup>18)</sup>」ケースであり、試行錯誤的行動は含まれない。「学習Ⅰ」とは、「反応がひとつに定まる定まり方の変化、すなわち初めの反応に代わる反応が、所定の選択肢群のなかから選びとられる変化<sup>19)</sup>」である。道具的条件付けのように、行動に対して一定の反応の結びつきが得られる場合である。「学習Ⅱ」とは、「選択肢群そのものが修正される変化や、経験の連続体が区切られる、その区切り方 punctuation の変化<sup>20)</sup>」であり、通常は学習Ⅰを繰り返し行うことにより試行錯誤の回数が減少し、一定のパターンの獲得が得られるようになる。習慣を形成していく階型であるといえる。しかしそれゆえに、学習Ⅱで得られる諸前提が自動的に固められていくという性質をもつため、学習Ⅱに変化をもたらすことはなかなか容易ではないということになる。「学習Ⅲ」は、「代替可能な選択肢群がなすシステムそのものが修正されるたぐいの変化<sup>21)</sup>」であり、学習Ⅱを構成しているシステム、〈自己システム〉に対して変革を迫っていくものであるといえる。〈自己システム〉が〈エコシステム〉へと溶解してゆくような変化として表せるであろう。しかし、このレベルの変化を強いられる人間とある種の哺乳動物は時として病的な症状をきたすかもしれない。「学習Ⅳ」は、学習Ⅲに対して生じる変化になるが、「地球上に生きる（成体の）有機体が、このレベルの変化に行きつくことはないと思われる<sup>22)</sup>」とベイトソン自身が述べている。ここから示されるように、ゼロ学習から学習Ⅳへは、その学習がなしているコンテキストがより大きなコンテキストへと飛躍していったといえる。また、これらの学習の階型は、学習の進む直線的な段階のプロセスを示しているものではない。それぞれの種類の変化において「質」が異なり、論理の階型が異なるということであるため、同時に異なった階型の学習が生じていることもあれば、異なった階型間の学習を行き来するということも日常的に生じていると考えられる。

ここでアルコール依存症の問題に戻ると、先に示した、自分はアルコールに勝てるのだという「アルコール依存症的プライド」は、「学習Ⅱ」の産物として捉えることができる。アルコール依存症者にとって、「自分」VS「酒」という図式が習慣化され身についているといえる。それに対して、「どん底」を経験することによって〈自己+酒〉というどう見ても自分より大

きなシステムの存在を知らされ、アルコールと共にあるという〈自己+酒〉のパーソナリティへの変化、そして、自分を越えた大きな力に〈自己システム〉をゆだねることは、学習Ⅱの前提から解放された一種の飛躍であり、「学習Ⅲ」として考えることは可能であろう。アルコール依存症者は、AAの回復のステップに依りながら、それまでの自己とは異なる、新しい人生を生き始めるのである。それは、「飲まない生き方」を実行し始めることであり、またそれは単にアルコールを飲まないということだけではなく、ボロボロになった人間関係を修復していくプロセスでもある。このことは、自分より大きな力を認めることによって、そしてそれとの相補的な関係を認めることによって可能になっているといえる。その変化はAAの用語で言えば、先にも述べたように、「ハイヤーパワー」「自分なりに理解した神」に自己をゆだねることであり、それはそれぞれの人の「どん底」の体験がきっかけとなって生じるのである。またこのようなエピステモロジーの変化がさらに進んだときには、AAでは「霊的に目覚める」という言い方もなされている。ベイトソンは、「Ⅲのレベルに到達し、自分の行動のコンテクストが置かれたより大きなコンテクストに対応しながら行動する術を習得していくにつれて、“自己”そのものに一種の虚しさ irrelevance が漂い始めるのは必然だろう。経験が括られる型を当てがう存在としての“自己”が、そのようなものとしてはもはや『用』がなくなってくるのである<sup>23)</sup>」という。このようなレベルの変化は、「自己」の根本的な変化を伴うため、確かに学習Ⅲを試みるだけでも危険であるといえる。しかし、学習Ⅲへのジャンプが成功した場合、学習Ⅱで習得されていたことの多くが崩壊するかたちで矛盾が解消されるであろうし、新たな再生へとつながるのである。したがって、学習Ⅲは、破壊に至る危険性と新しい再生への可能性の両方を合わせもっているといえる。そして、「学習Ⅲがきわめて創造的に展開した場合、矛盾の解消とともに、個人的アイデンティティがすべての関係的プロセスのなかへ溶出した世界が現出するかもしれない<sup>24)</sup>」とベイトソンはいう。

### 3 J. レイヴ&E. ウェンガーによるAAの分析

#### — 徒弟制を通じたアイデンティティの変容過程 —

#### 3.1. 新参者から古参者へと至る過程への正統的周辺参加

レイヴ&ウェンガーは、AAにおける実践の中に一種の徒弟制を見出し、AAに初めて足を運んだアルコール依存症者（新参者）が次第にAAの道にたけた人（古参者）となってゆき、正統的周辺参加から正統的十全参加の過程を通じていかにアイデンティティを変容させていくかという観点から分析したという点で特徴的である。

AAのミーティング<sup>25)</sup>において、アルコール依存症の新参者は、「実践やアイデンティティがAAの共同体そのものになっている人びとの集まりの中で過ごす<sup>26)</sup>」。また古参者は、このミーティングの中で、「飲酒者としての過去と無飲酒者になったプロセスとのいきさつを証言する<sup>27)</sup>」。そして、新参者もまた、ミーティングへの参加を継続していくことで、AAの方針や回復のための心得などを身につけていき、次第に古参者になっていくというプロセスをたどる。このプロセスを、レイヴ&ウェンガーは、アルコール依存症者がAAにおいて、周辺の参加者から十全的参加者へと進むプロセスであるとして説明するのである<sup>28)</sup>。正統的周辺参加と

は、状況に埋め込まれた活動とみなされた学習における特徴を示すものであり、「学習者は否応なく実践者の共同体に参加するのであり、また、知識や技能の修得には、新参者が共同体の社会的文化的実践の十全的参加（full participation）へと移行していく<sup>29)</sup>」過程であるとレイヴ&ウェンガーはいう。したがって、新参者にとっての参加とは、すでにAAという状況に埋め込まれており、決してAAという実践から切り離されたものではない。そして、各人それぞれの多様な形態で参加しているといえる。

次に、どのようになったときに、古参者として認められるようになるのかということであるが、古参者として最も認められるという段階として考えられているのが、回復の「12のステップ」の12番目のステップに至ったときであるという。12番目のステップとは以下である。

12. これらのステップを経た結果、霊的に目覚め、このメッセージをアルコールに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した<sup>30)</sup>。

この12番目のステップに至るというのは、「私たちの誰一人として、これらの原理を完全に実行できた人はいないのだ<sup>31)</sup>」とAAの中では言われるほど稀なことなのではあるが、完全ではなくともこのステップに近づき、「AAの会員はアルコール依存症者かもしれない部外者に一对一の相互交流ではたらきかけるとき、十二のステップの最終項目に従っている<sup>32)</sup>」のだとレイヴ&ウェンガーはいう。AAの回復の「12のステップ」に対しては、レイヴ&ウェンガーは、アルコール依存症者が徒弟制を通して進歩していくための進行表的な役割をもっており、回復のための大きな助けになる存在として捉えている<sup>33)</sup>。

以上のように、レイヴ&ウェンガーにとって、実践共同体の成員になっていくことが学習の成功であり、アルコール依存症者にとっては、AAの共同体に入ってAAのモデルを獲得してゆき、AAの成員としてのアイデンティティをもっていけることが重要であり回復の道標となっていると考えられているのである。

### 3.2. パーソナル・ストーリーを「語る」ことによるアイデンティティの変容過程

次に、アルコール依存症者が正統的周辺参加を通じて新参者から古参者になってゆく過程で、どのような変化が見出せるのであろうか。レイヴ&ウェンガーは、アルコール依存症者のアイデンティティ<sup>34)</sup>の変容過程に注目している。つまり、「アルコール依存症者でない飲酒者から断酒中のアルコール依存症者になることであり、世界でのものごとの見方、振る舞い方が変容するということである<sup>35)</sup>」。AAでは、いったんアルコール依存症になると永久にアルコール依存症であり“正常な”飲み方に戻れることはない、ということは受け入れるべき事実であるとされており、だからこそそ今日一日をアルコールなしで充足した人生を生きることと専心するのだという<sup>36)</sup>。そして、このようなアイデンティティの変容を促進させる一つの重要な道具だとして、レイヴ&ウェンガーは、パーソナル・ストーリーを「語る」ことに着目するのである。

では、新参者はどのようにして、パーソナル・ストーリーを「語る」ことができるようになっていくのであろうか。AAのミーティングにおいて、参加者はそれぞれアルコール依存症に関わる自分の経験を語るが、新参者はAAの古参者が語る語りをお手本として接しているという

ことである。アルコール依存症者たちにとって、「AAのストーリーを語ることは、あからさまに教えられて身につけることではない<sup>37)</sup>」のであり、あくまで徒弟的關係の中で「学んで」いくという関係にある。つまり、新参者は古参者から「語ることを」学ぶのである。そして、自分自身と自分の問題をAAの見方で見るとを学んでいくことによって、アルコール依存症者は、成功すなわち回復へと向かうことができるのだと、レイヴ&ウェンガーは考える<sup>38)</sup>。「入会者はAA会員としてのアイデンティティをもつことから始める。……やがて自分自身を断酒中のアルコール依存症者とみなし、自分の人生を『証し』として再解釈するようになるのである<sup>39)</sup>」。アルコール依存症者の回復にとって、仲間のパーソナル・ストーリーを「聞く」ことそして自分のパーソナル・ストーリーを「語る」ことこそ、回復のための特效薬となっているといえる。そこに、「自分ひとりではない」という感覚を抱くことによって、アルコール依存症者である自分を受け入れられるし、回復への希望も持てるのである。そして、「語る」ことを続けることを通じて、「断酒中のアルコール依存症者」としてのアイデンティティを継続していくことができるのだといえる。

#### 4 G. ベイトソンとJ. レイヴ&E. ウェンガーの分析をめぐる考察

AAにおける実践を、ベイトソンおよびレイヴ&ウェンガーも、「学習」に関わる事象として考えていた。しかしながら、ベイトソンとレイヴ&ウェンガーは、同じ「学習」という名を以って、同じAAという実践を見ていながらも、AAの別の側面を見ていたといえる。ベイトソンが最も力点を置いているのが、自分を越えた力に対して、自己をゆだねていくことである。つまり、〈エコシステム〉の中に溶解しているような〈自己システム〉を考えていたといえる。そして、それをAAという実践において見出したのである。一方、レイヴ&ウェンガーは、AAという実践共同体に参加し、自分のパーソナル・ストーリーを「語る」ことによってAAに十全的に参加してゆくことができ、その結果としてアイデンティティが変容していくことに最も力点を置いているといえる。ベイトソンとレイヴ&ウェンガーの見方の違いは、AAに対する焦点の当て方からもいえる。レイヴ&ウェンガーは、徒弟的な実践形態すなわち正統的周辺参加が見られる事例として、他の4つの徒弟制の事例（産婆、仕立屋、操舵手、肉屋）と並列的にAAを取り上げている。つまり、レイヴ&ウェンガーにとって、AAは正統的周辺参加として説明ができる事例の1つとしての位置づけである。それに対して、ベイトソンにとっては、むしろAAでなければならなかったといえる。AAの中にこそ、ベイトソンの思想が共通して見出せるものとして注目していたといえる。言い換えれば、レイヴ&ウェンガーが、実践共同体への参加のあり方を問題としているのに対して、ベイトソンは、自分より大きなものによって動かされている感覚をもつこと、「自己」を無にせよ、といった「自己」概念に対する思考を問題にしていたといえる。

ここで、ベイトソンとレイヴ&ウェンガーの「自己」概念をみておくと、ベイトソンは「個」を中心におく西欧近代的な「自己」概念には批判的であったのに対して、レイヴ&ウェンガーは、「個人」の実践共同体への参加の仕方を問題としているといえる。レイヴ&ウェンガーは、個人から学習を語り始めるよりもむしろ社会的実践の方から語り始めると、個人はその実践共



共同体への参加が不可欠のプロセスとなり、「社会文化的共同体の成員としての個人」としての見方が可能になるとする。学習において、個人は常に社会的共同体と関係づいており、その社会的実践の中で十全的参加者になること、成員になることが、一人前になることを意味している。また、学習とは関係論的に捉えられ、アイデンティティの形成を含むことになる。つまり、アイデンティティは、個人の内部で形成されるのではなく実践共同体との意味の交渉（negotiation）の中で形成されるもので、「人間と、実践共同体における場所およびそれへの参加との、長期にわたる生きた関係である<sup>40)</sup>」として考えられるのである。一方、ベイトソンも、「自己」を独立した「個」として捉えることに批判的である。ベイトソンは「自己」を円環的な自己修正システム（self-corrective system）、すなわち〈自己というコミュニケーション・システム〉として捉え、そこでは身体と精神は二分化されない。例えば、目の見えない人が杖を使って歩く場合、その人の自己とは、杖の柄と皮膚を境とした身体ではなく、杖と身体が一体となってひとつのシステムをなしているといえる。その中で「自己」とか「私」とかいう境界を明確に定めるのは困難でありそのような問い自体がナンセンスである。つまり、「自己」というのは、単独で独立したものではなく、環境や他者やモノを含んだ全体を1つのシステムとして捉え、〈自己というコミュニケーション・システム〉として私たちのコミュニケーション的行為を考えていくべきであるというのがベイトソンの見方である。したがって、ベイトソンもレイヴ&ウェンガーも、学習を、学習者個人の出来事として完結するものではなく、〈自己+環境〉というコミュニケーション・システムの中で生じていることであり、新参者や古参者が互いに参加している社会的共同体の実践の中で生じていることであるという意味において、関係論的に捉えているという点では共通しているといえるだろう。

しかしながら、ここでベイトソンとレイヴ&ウェンガーの決定的な違いが現れる。それは、〈自己システム〉よりも大きなシステムへの意識とそれとの「相補的」な関係を言及しているか否かである。ベイトソンは、〈エコシステム〉あるいはAAでいうところの「ハイヤーパワー（自分なりに理解した神）」に対して、どうにもならない自分、そこにゆだねざるをえない自分という認識をもつことが、ひとつのエピステモロジーの変化であり、ベイトソンが強調している点であるといえる。そのとき、自己はどうでもよくなり、自己の境界は溶けてゆくということである。そこで今度は、ベイトソンのいう「エピステモロジーの変化」とレイヴ&ウェンガーのいう「アイデンティティの変容」に焦点を当てて考えてみたい。ここで、ベイトソンの学習の論理階型に照らして考えてみると、「エピステモロジーの変化」と「アイデンティティの変容」は論理の階型が異なるといえるのではないか。「アイデンティティの変容」よりも、「エピステモロジーの変化」の方がより大きなシステムに対する話であるといえるだろう。つまり、「アイデンティティの変容」は、ベイトソンのいう〈自己システム〉における変容過程であり、「エピステモロジーの変化」は〈エコシステム〉に対する変容過程であるということである。例えば、ある個人のアイデンティティが変容したものの、その人自身を取り巻くエピステモロジーは変化していないということは日常的なことと考えられる。ベイトソンは、〈自己システム〉に対して、それをとりまく〈エコシステム〉を常に意識している。ベイトソンのいう「エピステモロジーの変化」とは、〈自己システム〉が〈エコシステム〉の中に溶け込んでいくよ

うなプロセスを意味しているといえる。したがって、「アイデンティティの変容」が〈自己システム〉の論理階型に属するとなると、正統的周辺参加に関わるレイヴ&ウェンガーの理論においては〈エコシステム〉の次元が考えられていないといえるであろう。ベイトソンは、アルコール依存症者がAAでの実践を通じて回復していくプロセスを、彼らの「エピステモロジーの変化」すなわち〈自己システム〉の改変として分析し、学習の階型としては「学習Ⅲ」として位置づけたといえる。〈自己システム〉の次元は「学習Ⅱ」であり、〈エコシステム〉の次元は「学習Ⅲ」であるといえる。ベイトソンは、「自己」概念を〈自己+環境〉というコミュニケーション・システムとして捉えなおすことを促しただけではなく、〈エコシステム〉との関係性をも常に意識し、〈自己システム〉の境界があいまいになっていくような世界を描いているのである。そして、「学習Ⅲ」のなかに、ベイトソンが批判的に見ていた近代西欧的な「自己」概念からの解放への方向性を展望していたといえる。

最後に付け加えれば、以上のようなことは、AAにおける「匿名性」の原則<sup>41)</sup>とも大いに関わっているといえるだろう。まさしく、Alcoholic Anonymousの“Anonymity（無名であること）”の意味である。AAのミーティングにおいて個人はニックネームを使用し、活字や映像など広報活動などの公のレベルにおいても常に個人名は伏せられる。それは、活字、電波、映像のレベルでは、いとも簡単にどこまでも増大するエゴ、個人として認められたい、支配したいという欲求に歯止めをかけるためであり、個人的なレベルではメンバーが無名であることによって全員のプライバシーが守られるためである<sup>42)</sup>。ベイトソンも、AAの匿名性の原理を、単に過去の恥辱の隠蔽とかいうことを超えて、「個として立つ」ことを防ぐ原理であるとして注目していた<sup>43)</sup>。ベイトソンのいう「学習Ⅲ」において、〈自己システム〉が〈エコシステム〉の関係プロセスの中に溶出してゆく世界とは、AAにおいては、この匿名性の原理もそこへと繋がってゆく大きなヒントであるといえよう<sup>44)</sup>。

## 5 おわりに

以上のように、ベイトソンとレイヴ&ウェンガーによるAAに対する「学習」論的なアプローチからの分析を出発点として考察してきたが、次第にAAをめぐる考察の論点は「自己」概念への問いへと収束してきたように思われる。

ここで改めて、ベイトソンとレイヴ&ウェンガーの「学習」に関する捉え方の違いをまとめておくと、レイヴ&ウェンガーは、実践共同体への参加の仕方、つまり実践共同体において新参加者が古参加者から学ぶという過程を「学習」として捉えており、それは必然的に「アイデンティティの変容」にも関わる過程であったといえる。他方、ベイトソンは、「自己」概念への問い直しを伴う、「エピステモロジーの変化」に関わることとして「学習」を捉えようとしていたといえる。これらはともに、「学習」を個人の中の出来事にとどまらない、状況の中において、あるいは〈自己+環境〉というコミュニケーション・システムにおいての事象として捉えるという意味で、関係論的なアプローチであるといえることができる。しかしながら、ベイトソンの学習の階型論に両者を照らして考えてみると、〈自己システム〉を形成する階型としての「学習Ⅱ」と、〈エコシステム〉との相補的關係を常に意識しながら〈自己システム〉と一体化

していく過程としての「学習Ⅲ」において、レイヴ&ウェンガーの正統的周辺参加の理論で示されている「アイデンティティの変容」は「学習Ⅱ」の次元として考えられ、「学習Ⅲ」の次元は考慮に入れられていないといえるであろう。したがって、ベイトソンとレイヴ&ウェンガーの理論の違いは、「学習Ⅲ」の次元を考えているか否かということであるといえる。

本稿では、自己を超えたより大きなシステムである〈エコシステム〉に対して〈自己システム〉が溶解していくような「学習Ⅲ」という学習の階型を設定していくことにどのような意味があるのか、学習論としての可能性を具体的に述べるということまでは至らなかったが、私たちの「学習」にとって何か非常に重要なことが含まれていることを感じずにはいられない。これらを生涯学習と関わる日常的実践の学習理論としてさらに発展していけることを今後の課題としたい。

1) Alcoholic Anonymous World Services, Inc., *Alcoholics Anonymous*, New York, 1979,2000, AA 日本出版局（訳編）『アルコールクス・アノミマス——無名のアルコールクたち——』NPO法人 AA日本ゼネラルサービスオフィス（J S O）、2005年。

2) Bateson, G., *Steps to an Ecology of Mind*, Chicago and London: University of Chicago Press, 2000, p. 315. (Originally Press1972), 佐藤良明訳『精神の生態学』（改定第2版）、新思索社、2000年、邦訳 p. 428。

3) *ibid.*, p. 312. (邦訳 p. 424.)

4) AAの「12のステップ」とは次の通りである。

1. 私たちはアルコールに対して無力であり、思い通りに生きていけなくなっていたことを認めた。
2. 自分を越えた大きな力が、私たちを健康な心に戻してくれると信じるようになった。
3. 私たちの意志と生き方を、自分なりに理解した神の配慮にゆだねる決心をした。
4. 恐れずに、徹底して、自分自身の棚卸しを行い、それを表に作った。
5. 神に対し、自分に対し、そしてもう一人の人に対して、自分の過ちの本質をありのままに認めた。
6. こうした性格上の欠点全部を、神に取り除いてもらう準備がすべて整った。
7. 私たちの短所を取り除いて下さいと、謙虚に神に求めた。
8. 私たちが傷つけたすべての人の表を作り、その人たち全員に進んで埋め合わせをしようとする気持ちになった。
9. その人たちやほかの人たちを傷つけない限り、機会あるたびに、その人たちに直接埋め合わせをした。
10. 自分自身の棚卸しを続け、間違ったときは直ちにそれを認めた。
11. 祈りと黙想を通して、自分なりに理解した神との意識的な触れ合いを深め、神の意思を知ることと、それを実践する力だけを求めた。
12. これらのステップを経た結果、私たちは霊的に目覚め、このメッセージをアルコールクに伝え、そして私たちのすべてのことにこの原理を実行しようと努力した。

(AA日本出版局、前掲書、pp. 85-86.)

5) Bateson, *op. cit.*, p. 322. (邦訳、p. 436.)

6) *ibid.*, p. 322. (邦訳 p. 436.)

7) *ibid.*, p. 322. (邦訳 p. 436.)

8) *ibid.*, p. 323. (邦訳 p. 437.)

9) *ibid.*, p. 323. (邦訳 p. 437.)

10) *ibid.*, p. 325. (邦訳 p. 440.)

11) *ibid.*, p. 325. (邦訳 p. 440.)

- 12) *ibid.*, p. 326. (邦訳 p. 441.)
- 13) *ibid.*, p. 326. (邦訳 p. 441.)
- 14) ベイトソンは、人間のやりとりが全て相補的なものであることが好ましいという主張をしているわけではない。ここでは、〈自己システム〉とそれを包むシステム（すなわち〈エコシステム〉）が、必然的に相補的な関係をなすということが指摘されているだけである。（*ibid.*, p. 336, 邦訳 pp. 453-454.）そのことは、当然のことではあるが、私たち人間がそのことをなかなか理解していないということへの警鐘をベイトソンは鳴らしているといえる。
- 15) 「どん底」の体験がどのような形で現れるかは、人によってそれぞれである。ベイトソンは、アルコール性譫妄症の発作、酩酊時の記憶の喪失、夫婦関係の破綻、失職、回復の見込みなしという診断などを例として挙げている。（*ibid.*, p. 329, 邦訳 p. 445.）
- 16) *ibid.*, p. 329. (邦訳 pp. 444-445.) 「どん底」を経験したとき、人は〈自己+酒〉という「どう見ても自分より大きなシステムの存在を、パニックとともに知るのである」とベイトソンは書いている。（*ibid.*, p. 330, 邦訳 p. 446.）
- 17) ベイトソン自身は、アルコール依存症の理論の展開において直接、自身の「学習の階型論」を用いて説明を行っていない。しかし、1971年にアルコール依存症の理論に関する論文を発表した翌年の1972年にそれまでのベイトソンの学習論に関わる理論を整理・加筆されたものとして「学習の階型論」に関する論文が出されている。したがって、AAを通じたベイトソンの考察が、ベイトソンの学習理論に対しても影響を与えており重なりがあると考えられる。ベイトソンの学習論については、1941年に発表された「社会計画と第二次学習」が最初であり、それらを整理したものとして、1964年に「ゼロ学習」「学習Ⅰ」「学習Ⅱ」までの理論が展開されている。そして、「学習Ⅲ」についての見解を加えたものが1972年に「学習とコミュニケーションの階型論」として発表されている。  
 Bateson, G., "The Cybernetics of 'Self': A Theory of Alcoholism", 1971.  
 Bateson, G., "The Logical Categories of Learning and Communication", 1972.
- 18) Bateson, *op.cit.*, p. 293. (邦訳 p. 399.)
- 19) *ibid.*, p. 293. (邦訳 p. 399.)
- 20) *ibid.*, p. 293. (邦訳 p. 399.)
- 21) *ibid.*, p. 293. (邦訳 p. 399.)
- 22) *ibid.*, p. 293. (邦訳 p. 399.)
- 23) *ibid.*, p. 304. (邦訳 p. 413.)
- 24) *ibid.*, p. 306. (邦訳 p. 415.)
- 25) レイヴ&ウェンガーの著作 *Situated Learning—Legitimate Peripheral Participation* の翻訳書、佐伯胖『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加——』における訳語では「集会」と訳されているが、日本のAAにおいても「ミーティング」という語が一般的に使用されているので、本文においても「ミーティング」の用語で統一した。
- 26) Lave, J. & Wenger, E., *Situated Learning—Legitimate Peripheral Participation*, Cambridge: Cambridge University Press, 1991, pp. 79-80, 佐伯胖訳『状況に埋め込まれた学習——正統的周辺参加』、産業図書、邦訳 p. 60.
- 27) *ibid.*, p. 60. (邦訳 p. 60.)
- 28) 「周辺の (peripheral)」という語は積極的な意味で使用されている。レイヴ&ウェンガーによると、「周辺性というのはことのはじまりを意味しており、しだいにのめり込んでいくことにより理解への資源へのアクセスを増やしていくこと」であり、概念上の反意語は「進行中の活動への無関係性 (unrelatedness) あるいは非関与性 (irrelevance)」であるとする。一方、「十全的 (full)」参加とは、「中心的 (central)」参加でもなければ「完全 (complete)」参加でもない。これらの語を注意深く避けるのは、「中心的」と言うことによって、実践共同体に単一に核とか中心があるわけではないにも関わらず、参加の到達点が一律な、一義的な「中心」あるいは直線的に進む技能習得という意味に帰着してしまう可能性があるからである。また、「完全」については、何か知識や集約的実践の閉じた領域があって、

新参者の「習得」についての測定可能なレベルがあるようになってしまうことを懸念しているからである。「十全的」という語を用いることによって、「共同体の成員性の多様に異なる形態に含まれる多様な関係を正當に扱う」ことが可能になると考えられている。(ibid., pp. 35-37, 邦訳 pp. 10-12.)

29) Lave & Wenger, op.cit., p. 29. (邦訳 p. 1.)

「参加 (participation)」の意味に関しては、学習に関わる従来の説明が、知識の内化の過程として説明されてきたことに対するアンチテーゼであるといえる。「参加は完全に知識構造として内化され得るわけでもないし、何かの道具として人為的に作られたもの、あるいは活動構造を橋渡しするものとして完全に外化され得るわけでもない。参加は、常に世界の意味についての状況に埋め込まれた交渉、さらには再交渉に基づく」のだという。(ibid., pp. 51-52, 邦訳 pp. 27-28.)

30) AA 日本出版局、前掲書。

31) 同上書、pp. 86-87。

32) Lave & Wenger, op.cit., p. 82. (邦訳 pp. 63-64.)

33) ibid., p. 80. (邦訳 p. 61.)

34) レイヴ&ウェンガーは、「アイデンティティ」とは、「人が自分を理解する仕方であり自分を見る見方、また他者からの見られ方、すなわち、自己についてのかなり安定した知覚」であるとしている。(ibid., p. 81, 邦訳 p. 62.)

35) ibid., pp. 80-81. (邦訳 p. 62.)

36) Alcoholic Anonymous World Services, Inc., *This is AA*, New York, 1986, AA 日本出版局 (訳編)『AA とは何か? — これがAA です —』、AA 日本ゼネラルサービスオフィス、2002年 (第7版)、pp. 5-6。

37) Lave & Wenger, op.cit., p. 82. (邦訳 p. 64.)

38) ibid., p. 84. (邦訳 p. 66.)

39) ibid., p. 84. (邦訳 p. 66.)

40) ibid., p. 53. (邦訳 p. 30.)

41) AA には、回復のための「12のステップ」とは別に、AA の一体性を守りグループを維持するための指針として「12の伝統」というものがある。その中でも「無名であること」に関わるものとして挙げられるのが、1 番目と11番目と12番目の伝統である。

1. 優先されなければならないのは、全体の福利である。個人の回復はAA の一体性にかかっている。

11. 私たちの広報活動は、宣伝よりもひきつける魅力に基づくものであり、活字、電波、映像の分野では、私たちはつねに個人名を伏せる必要がある。

12. 無名であることは、私たちの伝統全体の霊的な基礎である。それは各個人よりも原理を優先すべきことを、つねに私たちに思い起こさせるものである。(AA 日本出版局、『AA とは何か? — これがAA です —』、pp. 19-20.)

42) Alcoholic Anonymous World Services, Inc., *The AA Group*, New York, 1987, 1999, AA 日本出版局 (訳編)『AA グループ……すべてはグループから始まる』、AA 日本ゼネラルサービスオフィス、1999年、pp. 3-5。

43) Bateson, op.cit., p. 334. (邦訳 p. 450.)

44) AA の匿名性との対比でいえば、日本で誕生したアルコール依存症者に対するセルフヘルプ・グループとして「断酒会」が存在している。断酒会はAA に影響されているものの、AA の匿名性の原則を捨て、断酒会員は姓名を名乗ることを原則としている。

(社団法人全日本断酒連盟ホームページ、断酒のすすめ — 断酒会規範)

<http://www.dansyu-renmei.or.jp/susume/danshu5.html> (2005/2/5にアクセス)